

祠堂から村廟まで：中国の農村地域からみた民間信仰の復興

—河北省武安市固義村における李氏祠堂を事例として—

From the ancestral temple to the Village temple: From the regional rural China to see the revival of folk beliefs

-A Case Study on the Li's Ancestral Temple in Guyi Village, Wuan City, Hebei Province-

从祠堂到村庙：论现代中国农村地域民间信仰的复兴

—以河北省武安市固义村的李氏祠堂为例

白 松強 (BAI Songqiang)
九州大学 (Kyushu University)

Abstract

Since the Reform and Opening up in China, especially since the 1990s, in order to establish a national cultural symbol system, the Chinese government has carried out large scale activities for the protection of intangible cultural heritage with traditional culture as the representative. Under this background, the author, by studying the case of the Li's Ancestral Temple transferring from a private temple of the Li's to a communal temple worshiped by the whole village, will investigate the possible factors which cause this transition. Thereby, it comes to the conclusion that the folk beliefs, as one type of traditional culture and originally labeled superstition, though it hasn't been recognized by the nation as a religious phenomenon, might be recreated and revitalized with the help of other forms in case of integration of multiple factors.

Keywords: ancestral temple, rural areas, traditional culture, folk beliefs, revival

1. はじめに—問題の所在

洋の東西を問わず、人々にとって神様がいるということは当たり前の事実である。特に民間信仰は、農村地域の住民にとって圧倒的な人気を誇る。中国においては、民間信仰は、特定の神様を問わず、各時代・各王朝によって盛んになったり、衰えたりする現象が不斷に起こっているが、農村に早くから深く根を下ろしていた痕跡が伺われる。19世紀、初めて中国の農山村の奥地に長く滞在し布教していたアメリカ人宣教師A. H. スミス¹⁾はその著書『支那の村落生活』の中に、「何事によらず、支那のことについて普遍化して述べることは安全ではない。しかし、普遍化が比較的安全であると思われる唯一のことは、帝国を通じて、各村落に廟が普及してゐるといふことであらう」というように書いていた（スミス1941:160）。内容からも分かるように、かつての中国は至るところに廟が遍く敷き詰めていた。

2013年1月、河北省武安市下の固義村【図1】という農山村にフィールドワークに行き、この華北のある古い村に15軒もの廟があることがわかった。このように多廟が建てられたということは、中国民間信仰の普遍性を物語っているといえよう。この廟の中で、李氏祠



堂という名の特別な印象の廟がある。中国の農村社会では、祠堂と村廟を区別している。血縁と地縁はきちんと分離している（麻2003）。李氏祠堂はもともと李という一族の先祖を祭ってあるところである。1953年、朝鮮戦争で、固義村の李氏同族から出身の5人の軍人が戦没した。記念に、李氏遺族は5人の塑像や遺物を祠堂に安置して祭っている。初めは戦没の5人の遺族のみ戦没日に祭祀する。その後、李氏同族も他姓の村民もよく李氏祠堂に来て参拝するようになった。

図1 地図で見る河北省、武安市及び固義村の位置

注:河北省観光案内図（中国地図社編）より筆者作成

また、5人の烈士の戦没日だけではなく、旧正月、清明祭、旧盆の日などに、村民達もほかの村廟と差別無く、祭られるようになった。このように、李氏祠堂への信仰は、数多くの村民の間に培われ育てられてきた信仰となった。

しかしながら、顧みると、中国の民間信仰は歴史上の各王朝・各時代に迷信とされ、弾圧される運命に直面した。二十世紀の中国において、帝政末期の清朝を含め、中国国民党政権および中国共産党政権は、近代国家建設を押し進めていく際に、民間信仰を「迷信」と見なし、それを近代国家の構想から外し、抑圧・弾圧を繰り返した。清朝末期は、列強各国と手を結んで、体制を崩しかねない宗教的勢力増大を恐れて、民間信仰を弾圧したという歴史がある。1911年に成立したアジア初の共和国の中華民国は、民間信仰を迷信の代表として否定してきた。更に、1928年に「神祠存廃標準」によって、除災祈福の神として多くの農民に信仰されている神祠が打破すべき建物として一挙に肅清される対象になった（馬場2006）。その後、1949年に中華人民共和国を建国した共産党は、マルクス主義の無神論を採用し、宗教の対象化と脱迷信化を更に徹底・貫徹する。即ち、公認の宗教を仏教・道教・イスラム教・キリスト教に限定して厳格な管理下に置き、またそれ以外の農村の寺廟（寺觀や寺社）や祠堂でなされる儀礼や祖先祭祀などは「封建迷信」として厳しい抑圧を加えてきた（川口2013）。言い換えれば、1864年に失敗に終わった太平天国の乱²⁾から1976に終結した文化大革命³⁾まで、民間信仰はこれまでの110年間の歴史の中で弾圧を受け続けてきた。

1980年代以降の中国では、いわゆる民間信仰の復興論が論じられるようになる。改革開放に伴い、共産党政府が経済発展を軸とした近代化へと国策を転換し、「宗教信仰」の自由も改めて確認したことを受け、民衆の宗教信仰心が抑圧された過去に反発する形でよみが

えって、各地で広く宗教と呼び得る営みが復興・新興するようになった（熊 2008）。特に 1990 年代末から、ユネスコ無形文化遺産に登録されるために、「伝統文化を保護、民族文化を発掘」という文化ナショナルリズムの出発点下で、国家の伝統文化を代表できる物件を必死に認定するという運動が全国を席巻している。

本論の視点は、このような背景の下で、中国河北省武安市下の固義村という農山村にフィールドワークに基づき、村民らの間で神通力を持っている李氏祠堂を事例として、もともと、李氏同族だけで祖先祭祀を行う李氏祠堂は、一体いかなる経緯で村民達で人気がある村廟になったものであるのか。宗教はアヘンであり、社会が発展するに従って宗教は自然と消滅するとのマルクス主義の宗教観に基づく中国共産党政府の宗教政策下で、特に民間の宗教信仰に強い規制が加えられるが、農村地域における民間信仰の生命力は、なぜ逆に盛んに行われているのか。村民達の身近な日常生活の場から多面的に捉える上で、華北村落における民間信仰の性格及び形成過程、また民間信仰の復興及び創造に関わる諸相を捉えることを目的としている。

2. 固義村落の形成と変遷

「世界の工場」とも呼ばれる中国は、実は伝統的な農業大国である。13 億の人口を抱え、うちの 3 分の 2 以上が農村で暮らしていることを示している。農業生産活動を中心として、家と家とが地縁的に繋がった農業集落⁴⁾を基礎に維持・形成されている農村社会は、各地の気候・風土を反映し、集落という地域社会の結び付きを基礎に、様々な主体によって多様な農業を展開しながら、中国の文化・伝統等を維持・継承している。

2-1 固義村落の位置

調査対象となる固義村は、中国河北省のほぼ南部に位置する武安市冶陶鎮域内の山村で



ある【図 2】。武安市は省都石家庄市から南西に約 196 キロメートルの距離にあり、2012 年当時の人口 85 万人、総面積 1806 平方キロメートル、そのうち盆地部は 25.3% に過ぎず、29.7% が山岳地、45% が丘陵地という地勢である。耕地面積 93.3 万畝⁵⁾であり、耕地の栽培方式は伝統的な農作物の粟を基本としていて、「中国粟の故郷」と呼ばれている。

図 2 衛星写真で見た固義村の位置 注:武安市観光局より筆者作成

また、主な農産物は小麦、トウモロコシ、サツマイモ、落花生のほかリンゴ、柿、ナツメ、梨、ブドウなど多彩である。また鉱工業も盛んで、石炭、鉄鉱石、希少金属類など豊富な地下資源がある。国家に認定された 58 国有重点炭鉱の一つと全国四大鉄鉱石基地の一つである。郭沫若⁶⁾が「武安鉄鉱峰峰煤（武安の山山は至る所石炭でいっぱいである）」という武安の鉱産資源を評した詩がある（王 2012）。中国国家統計局のデータによれば、武

安市は2012年度の国内総生産（GDP）が河北十強市で3位、全国百強市で51位にまで上昇した。

行政組織上は中心部（武安鎮）と郊外部（22鎮）に分かれ、その下に13鎮（町部）・9郷（農村部）、更に502行政村⁷⁾を下位とする編成である。このうち区・鎮・郷政府は何れも市行政の直属の機関であるのに対して、村は村民委員会（村民から選出された委員の構成）が行政の末端を担っている。固義村について言えば、武安市政府—冶陶鎮—固義村という組織系統に位置している。

固義村は、武安市の南西に位置する冶陶鎮内にあり、市の中心からおおよそ70.6キロメートル北西の方向へ伸びていく距離にある。そのうち北西側の約10キロメートルは高低、蛇行の続く山岳道である。冶陶鎮は北東の標高の高い山岳地帯を水源とする渓流の口河流域の平坦を除く大部分は山地である。この河流に合流する幾本かの支流の南口河・龍虎河に沿って村が点在している。固義村はこうした渓谷に位置する山村の一つである。

固義村の標高は700～800メートル、北は北虎河、南は南口河、渓流を挟んでわずかな平坦に集落が細長く形成されている。総面積4.5平方キロメートルのうち、70%はいわゆる荒れ山と雑木林である。残り30%のうち、普通畠と果樹畠を合わせると2.5平方キロメートル（3628畝）弱であるが、何れも山間の傾斜地に点在している。勿論水田は皆無であり、米食の習慣はない。農業の機械化・化学化はある程度進んではいるが、傾斜畠利用という不利な地勢条件に加えて、未だに手労働が主体となっている。伝統的な農業様式、非効率な農業機械の活用など様々な理由から低い生産性を余儀なくされている。農業だけの視角から見れば、必ずしも「貧しさからの解放」が達成されたとは言いがたい固義村が存在している。

2-2 村の歴史的展開

思っている以上に長い歴史を持っている固義村は、その歴史の源流は古い昔まで遡ることがもうできない。歴史的な根拠のある資料は、明朝天啓五年（1625年）版の『武安縣誌』⁸⁾によると、後周顯徳年間、村落の北側には普光寺や仏堂寺があるそうである。また、村で唯一の祠堂に祀られた李氏家譜によれば、元祖豊堂公が明朝洪武元年（1368年）に明朝政府の朝廷命令に従って、山西省洪洞県⁹⁾から固義村に移動したことが記載されている。再び、村の南外れにある奶奶廟に廟の由緒を刻んだ記念碑が建立されている。その碑文によるとこの廟が明朝永樂二年（1404年）に建てられたようである（杜2010）。このように、村の起源について、確実な記録されるようになったのは16世紀の明朝時代になってからであるが、実は、明朝時代の前に、固義村はもう一つ存在したと見られている。

何姓家、董姓家、安姓家、鮑姓家は、李姓家、丁姓家、劉姓家、馬姓家が明朝に移住する以前からこの村に暮らし農業を生業としてきた。固義村は苗字の区分と集中居住の位置から、西大社、劉莊戸、東王戸、南王戸という四つの区域に分けられる。王という苗字の人家の東王戸と南王戸は固義村の東、南に住んでいる、劉という苗字の人家の劉莊戸は固義村の北に住んでいる、固義村の西にある西大社は、丁、馬、何、董などの異なる宗族共同体が分散されている。現在、村に800戸以上、常駐人口4200人余りが暮らしている。旧正月になると、故郷に帰ってくる浮動人口を含めても5600人余りといわれる。地質が悪い上に、日照り続きでしばしば雨乞い祭を行っていた程で収穫は少なく、農業だけでは裕福な生活できなかった。男女自身が高校卒業してから、大学進学の見込みがないと、村外に出

稼ぎにいくことを通例としていた。

李姓古者（97歳・1916年生）の記憶によると、彼の祖父の話しによって、祖父の時代は50戸ぐらいだけであった。彼の子供当時の村の戸数は100戸未満程度であった。姓別に見ると、上記の八つの苗字は、当時の主要な姓の家々が居住していた。そうして見ると、村の開発の端緒は18世紀後半としても、今日の村の原型が形成されるのは19世紀から20世紀初頭であったと推定される。固義村の名前はよく変わっている。最初の名前は「固亦」といわれている、これは、昔村の周りに囲まれた2層の6棟の楼閣（南北に各々2棟、西東に各々1棟が配置されている）に関係があるそうである。夜、全ての楼閣を閉めると、外人が入ることができない。「固若金湯（金城湯池）」の意味からと考えられる。清朝時代、「故亦」という名前に変わった、現存した清朝光緒元年（1875年）に清書した儺劇の写本には「故亦村西大社」という名前を付けている。現存した他の儺劇の写本によって、民国十二年（1923年）までに、また「顧義」という名前に変わった。その時期、山西への交通の要路に臨んでいる固義村には、各地の商人がいつも雲集している、往来が頻繁、商売も盛んである。特に貿易取引においては「信義相顧（信義を守って、正義感を持つという人生信条を重んずる）」という信頼関係を普段から築いていくことが大切である。それから、人々は以上の名前を総合して、今に至るまで、「固義」という名前を付けて呼ばれてきた（白2013）。

1916年から十二年間の軍閥時代は流血の時代であった。固義村の歴史は更に悲惨なものであった。複数の戦争による人口急減が現れた。この間、国民党、共産党が相次いで設立された。1930年代、国共内戦で広範な人民の根本利益を鼓吹する中国共産党が南方根拠地の喪失から長征によって西北地区に到達した。実力を保存するために、共産党は山岳地域に国民党軍を誘導した。1945～1948年、治陶鎮が中国共産党中央により正式に成立された晋冀魯豫中央局¹⁰⁾（書記鄧小平）と晋冀魯豫軍区（司令劉伯承）の駐屯地としての歴史がある（錢2008）。固義村は治陶鎮に最も近い行政村として、勿論、共産党に解放された。共産党が入村し、当時の正副2人の村長の権限を実質上掌握し、貧農救済策を強引に推進していく。建国後1952年まで、固義村は軍事拠点として、造兵廠・印刷所・貯蔵庫などの関連施設が置かれた。

その後30数年間は、中国農村にとって激動の時代であった。共産党政府は、全国の農村で人民を動員し、土地改革や大躍進運動、そして人民公社、文化大革命へと続く社会主義改造を進めていった。固義村も決して例外ではない、土地改革により村には均質的な小農社会が作り上げられることになった。即ち若干の役畜・農具を共同使用し、共同労働をする互助組の設立の推進である。当時の固義村の戸数は110戸前後であったが、5～6戸を一組とする互助組に全戸が加入することになった。

1958年に村の生産性の向上という名目で、大規模な水利工事や植林事業に動員され、互助組は大躍進運動へと発展した。建設工事用の大型機械がない状況で、「人海戦術」と言われる極めて労働集約的な非効率な方式が取られた。また、英・米を追い越し、社会主義の優越性を示すために、重工業が国の生産力の根源という信仰にも似た思い入れがあるようで、村の至る所で小型の製鉄所が建設された。これらの製鉄所は、中国での伝統的な製鉄方法である「土法製鉄」と言われるもので、鉄は実際に用いることが出来ない屑鉄を大量に生み出した（楊2012）。このように政策の失敗や天候不順で、村は深刻な食糧不足により多くの餓死者を出した。

同時に、農民が一郷一社の公社に加入する人民公社が全国に一気に普及することになった。固義村は、当時の冶陶郷（馬村・安荘村・安子嶺・琅鉛村など）の範域を一つの単位とする冶陶人民公社に含まれ、その下位組織の生産大隊の一つに位置付けられることになった。固義村の生産大隊は、その下部に集落を西部と東部に2分して生産小隊を組織することになった。この人民公社時代は、共同耕作地の他に年齢・性別を問わず、均等に口糧田と宅地の分配を行っている。この制度を主要な契機として結婚と同時に分家が促進され、1958年に公社発足当時に約110戸だった戸数が、1982年の公社解体時には一挙に270戸程に増加したことが注目された。

なお、1966年に中国全土に渡って文化大革命の嵐が荒れ狂うという混乱に直面した。固義村においてこの直接の影響として注目されたのは、批難する対象を血眼で探し、見つけられなければ実の親子同士で告発を為合って、夫婦、兄弟、親友、全ての人間が信じられなくなり、人間不信で自殺する、人がひきもきらない状態であり、村の家庭にも深刻な傷を残した。また、墓地の農地化、伝統的な信仰行事の禁止、村廟の信仰施設の破壊など、村の現状を無視し、自然環境をすべて破壊し、村の経済を混乱させ、内戦状態の様相を呈した。

1978年共産党政府は改革・開放政策を打ち出した後、固義村は農業生産請負制を導入したことにより、人民公社に替わる家族営農制度が確立し、村民の勤労意欲は向上した。1990年代半ば以降、国民の消費意欲は旺盛で、次々と新しい需要が生まれた。固義村は、鉱山や炭坑の採掘及び石炭加工などの優位性を發揮し、小規模な炭鉛開発が無数に行われるようになって、村民の生活水準が改善される同時に所得格差も拡大し、村民の階層分化が著しく進行している。

2005年、村祭「捉黄鬼」が国家第1回無形文化遺産リストに指定されたことに伴い、村落の観光開発も進められていった。現在当該農山村は武安市下では最大の農村観光地であるばかりでなく、河北省というくくりで見ても有数の農村観光地に数えられる。その主たる特徴としては、「中国黄河流域最古仮面劇」というキャッチフレーズで語られるように、単なる観光やレジャーというよりも、儒仏道三教と結びついた固義村民の民間信仰の儀礼や伝統的な文化に接し、農家村舎の景観や豊かな自然に触ることで、近代的な生活様式に疲れた人々が、リフレッシュしたり、癒しをもとめられる点にある。

固義村が都市部の観光客に人気があるのも、祖先崇拜や自然への畏敬と結びついた伝統的儀礼や豊かな自然が、今日の中国の都市部では失われつつある農村の景観や親密な近隣関係、親族関係へのある種の郷愁を呼び起こすためである。こうした固義村観光の基盤は、固義村民の生活が農業、なかでも畑耕作を中心に展開してきたことと無関係ではない。農村観光は、農業就業人口を減少させ、固義村民の生活様式を大きく変容させた。

3. 李氏祠堂の歴史と概況

固義村の真ん中に東西の方向へ伸びていく1本の大通りがある。村外れの西から東へ向かう大通りを1キロメートルほど行くと鎮座されている李氏祠堂【図3】である。『武安県志』の記載によると、明朝時代の前に、固義村には唐代の李靖を追憶するため建立された

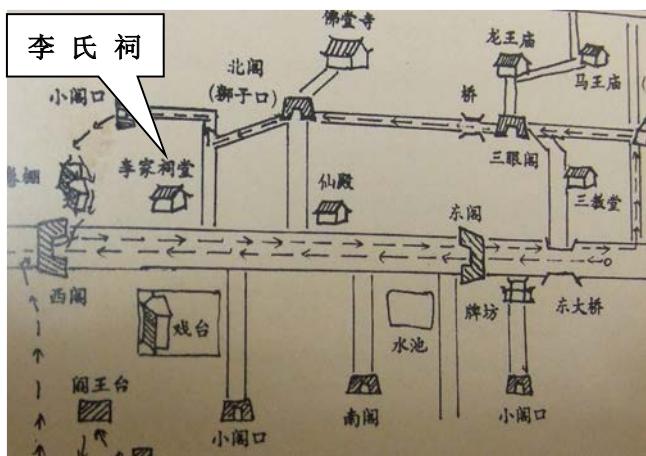


図3 地図で固義村の李氏祠堂の位置

注:武安儺戲 (杜学徳編・科学出版社・2010) より筆者作成

李氏祠堂の壁に彫られた記念文の中には、明朝建文二年（1400年）に移遷してきた李の支族によって建築され、その後、明時代の嘉靖二十五年（1547年）、清時代乾隆二十三年（1758年）に、清時代光緒四年（1898年）、中華民国十九年（1930年）に四回の大規模修繕を行ったとある。2000年、李氏祠堂は築後600年に当たり、李氏同族エリート達の寄付金によって再築された。近代的な日常生活を送る固義村の李一族の人々も年に数回はここに集い、大宴会を催すのである。例えば、祖先祀り、祝賀儀式、娶り嫁ぎ、納棺出棺なども常に李氏祠堂で行う。一族の絆をこのように深め、近代と伝統を融合させるのである。伝統的な中国農村社会において親族関係を規定するのに重要な役割を果たしたのが祖先の觀念である。祠堂は中国の伝統的な家族が集まって会議をする場所として、成功した一族になればなるほど立派な祠堂を持つ傾向がある。

李氏祠堂【写真1】の全体は構造が精巧で、整然と秩序立てられている。風水を窮めた作りが見事で、玄関のドアの真ん中には「祖徳、宗功」という色紙が貼ってある。祠内の祭壇には、李靖像が真ん中に置かれ、画像の下に、李氏宗譜がしつらえられており、右側と左側には世代に従って李氏の祖先の位牌が並んでいる。また、他的一族の名高い進士・貢元の額があり、これは難しい国家試験の合格者を出したことを、一族が誇りに思っていることを意味し、李氏の輩出した人材を掲揚している。周りの壁には「忠孝」、「廉節」の教訓が書か



写真1 武安市固義村の李氏祠堂の外観

靈顯王祠堂がある（羅 1547）。即ち、1368年の明朝時代の民族大移動の前から、固義村には李という苗字の一族が既に生活している、という事実がある。李氏家譜によれば、1368年に大規模な民族の大移動で別の李氏一族が山西省の洪洞県から固義村に移動した（杜2010）。従って、その後、両一族が、同じ李の苗字を名乗って、固義村に共住している。

れている。昔、中国人が忠孝、節操をとても重視していることが感じられる。李氏祠堂は建物は壯麗で、いたるところに緻密な細工で、梁や柱、窓など浅い彫り、深い彫り、浮き彫り、透かし彫り、立体彫りなどの伝統的な技法を駆使し、建物そのものが芸術品となつて、さすが古代建築藝術の優れた伝統と独特的な風格を持った建築である。2005年、李氏祠堂は治陶鎮に鎮レベルの文化財¹¹⁾と認定された。

4. 祠堂の祭祀とその変容

固義村には、中国の伝統的な農村家屋のような煉瓦造りの長屋ではなく、石造りの高くて大きな家屋が一般的なものとなるが、古い土壁と茅葺きの屋根のある古民家もある。他の村落とは趣きが異なっている。青い山を後ろにして、川の水に面していて、南国のようなびのびとした雰囲気が漂っている。西から村の入り口を出発して村歩道を辿れば、美しい自然の中に大小の寺廟が点在し、神と人と自然が静かに共存した姿がある。村唯一の祠堂としての李氏祠堂は、寺廟のように、李氏同族だけではなく、村民達による人気が高まっている。なぜ李氏一族の祠堂は、村民の絶大な尊敬を集めて、親しまれているのか。

4-1 元々の李氏祠堂

明朝初期の『明集禮・品官家廟』は『禮記』の条文を踏襲し、「天子七廟、諸侯五、大夫三、適士二、官師一、庶士、庶人無廟（天子は七廟、諸侯は五廟、大夫は三廟、上士は二廟、中士・下士は一廟、庶民は廟を建てず室内に祀ると決められている。）」と規定されている（科 2003:2）。固義村の李氏一族はその貴族身分秩序や社会的な特権で同族の家廟を建った。殷代にまで遡る祠堂（亦は家廟）は、自宗族の祖先の位牌を祀る建物として、族長が一族を集めて祠堂の前で栄光に輝く先祖について語り、一族内の事柄について相談し、内部の揉め事を解決し、また、先祖の成し遂げた偉業を受け継ぎ、育て、更に後世へと引き継ぎ、お互いの幸せを願るなどを行うところである。

李氏族譜の世系表によると、固義村の李氏一族は、同族遠祖の李靖を含めず、一世祖李天林から始まる現在まで第25世代に増殖してきた。李氏一族の命脈を延続させ、同族間の秩序を保つために、同世代の家族は、同じ一文字を名前に共有するという字輩の規則を作った。「天尚世朝国連邦、廷臣文学正有光、修齊治平全徳教、信義伝家顕長安」と一文字の字輩を共有することによって、全く異なる場所に住む同姓の人が、お互いの世代（長幼）をはっきりさせたり、先祖が同源かどうかを確認することができる。李氏祠堂の中央に衛公李靖の画像が配され、両側に左昭右穆¹²⁾の席次で左へ第1代李天林、第3代李世嗣、第5代李国芳、第7代李邦謙、第9代李臣侍、第11代李学肖、第13代李有宰、第15代李修遵、第17代李治瑜、第19代李全忠、第21代李教開；右へ向って第2代李尚臣、第4代李朝問、第6代李連高、第8代李廷崇、第10代李文增、第12代李正瑞、第14代李光秀、第16代李斎棟、第18代李平廷、第20代李徳邦、第22代李信年の位牌が並んでいる。

勿論、元々の李氏祠堂は、十二条の「李氏の掟」に従って、上記のように、先祖祀り、先輩功績の宣伝・啓発、一族の団欒や集会、同族幼児への教化育成、同族間の紛争解決、冠婚葬祭などに関わる儀式・行事を行う場所として、同族にとって最も身近な生涯學習拠点というだけでなく、同族の心の豊かさや人間として生きる喜び、楽しさ等に役立つ諸活

動を引き続き担っていくという重要な役割を果たしている。

1949年に建国した共産党政府が、1978年にかけて、宗教や迷信を撲滅し、既存の思想・習慣・信仰一特に儀礼・祭祀及び親族組織に関わる文化一の刷新を試みるようになった。固義村の劉氏祠堂、王氏祠堂と丁氏祠堂は、この一連の運動によって徹底的に破壊されただけではなく、一族間の活動もその後行われてこなかった。21世紀に入った今日でも、一向にその祠堂復興の兆しは見えないままである。逆に、李氏祠堂だけは信心深い同族によって手厚く守られている同時に、中央の政治統制の政策を利用して、一族の活動も多彩なものとなって、祠堂や祭祀も行っている。

4-2 戦没の李氏烈士

共産党政府が1950年、各地の政府に対し、全面的に民間宗教組織を取り締まることを指示し、この全国の市町村まで波及する運動の中で、政府は認定した階級を総動員し、民間宗教組織に打撃を加えた。同時に、共産党政府が更に共産党のイデオロギーが唯一合法的なイデオロギーであること、共産主義が唯一合法的な信仰であることを確立した。それからいわゆる「国を愛する」という信者が現れた。「国を愛する」信者になれば、国家の憲法による保護を受けることができる。実際には、民衆がどのような教えを信じるか、ということなど関係なく、基準は一つだけである。つまり、全て党の指揮に従って行動し、共産党がどんな教会や寺院よりも、上位にあることを認識しなければならない。キリスト教を信じるなら、共産党はキリストの神であり、佛教を信じるなら、共産党は佛教の釈迦であり、回教なら、共産党はアラーである。活佛といつても、共産党の認可がなければ活佛になれない、といった具合である。即ち、個人は党に従い言うべきことを行い、行動をしなければならない。信徒は各自の信仰を唱えながら、党の意図を守る。そうしなければ、弾圧の対象となるのである（関口2004）。

このような状況下で、固義村の李氏祠堂は、朝鮮戦争で一族五人の烈士の英雄事績によって、取り締まり対象と判断される運命から逃げることができた。1950年から1953年までの三年余り続いた朝鮮戦争において、中国は183108軍人の戦死者とほぼ100万の戦傷者を出したとされる（何2011）。この中で、河北省出身の軍人は10155名で、武安市出身の軍人は121名で、固義村出身の軍人は5名で、全員は李氏一族の出身である（瀋2002）。烈士の名簿【表1】は下記のようになる。戦没の五人の中で、李教強は警備隊員として、

表1 朝鮮戦争で戦没した李氏一族の烈士名簿

姓名	性別	年齢	生年月日	犠牲月日	所属部隊	死因	荣誉称号
李教強	男	25	1927.05.23	1952.09.29	後方勤務司令部工程署	戦没	革命烈士
李信天	男	23	1929.07.04	1952.11.02	砲兵指揮所第21師	戦没	革命烈士
李信柱	男	22	1930.10.20	1953.01.18	鉄道兵指揮所第3師	戦没	革命烈士
李義龍	男	21	1931.08.27	1953.03.15	第68軍第204師	戦没	革命烈士
李義鵬	男	23	1930.05.15	1953.07.22	応急修理指揮局第1師	戦没	革命烈士

注：資料は固義村史や聞き取により筆者作成

軍長、師長以上の高級指揮官の命を守るために先になくなつた。国家は国内の形勢から出発し、政治優先の政治路線に従つて、直ちに李教強に「革命軍人烈士」という高貴な称号や功労勲章を授けた。当時の武安県政府も県人民代表大会で、危篤に瀕しながら李教強は常人を超越した意志で将校の命を救い、職責を超えて、自分を捨てて武官を救つたので表彰すると発表した。また、中央政府や地方政府は、民衆を鼓舞し、人心を落ち着かせるために、李教強の遺族に物質的保障と精神的激励を提供し、愛国烈士遺家族への特別待遇を優待し、英雄の家族が尊厳を持って生活できるように奨励した。戦没の李教強への勲章、階級特進などの栄典や遺族への軍人恩給などの補償は、国家からの対応として、軍の士気維持、新兵募集、国威発揚などの理由で行われている。一方では、遺族の立場では、戦没者も同族の勇士や英雄とされ、積極的な賞賛・顕彰・美化の同時に、特定の宗教による慰靈・追悼・祈念などの儀式も行われている（丁 2010）。李教強のことは国家の栄誉としても、更に李氏一族の光榮になった。しかしながら、李氏の掟¹³⁾に従えば、李教強が祠堂に祀られ、祖譜に記載される資格がない。当時村民委員会の一員である李教強の父は、息子が入籍の資格がないが、その勲章や遺物などのものが祠堂に祀られれば、祠堂は迷信打破運動から逃げ、原本そのままを保存することができるかもしれないと考えた。族長に相談して、何度も一族全員で議論した上で、李教強のことは特殊な事例として、祠堂に祀られるようになった。その後、戦没した一族の他の四人は、李教強と同じ、勲章勲章や遺物は祠堂で置かれて、五人の烈士は祠堂で置かれて、五人の烈士は祠堂の守護堂神として、その靈験を發揮するようになったようである上のように、祠堂を守るための李氏一族は、五人の殉國烈士の功績を借りて、自族の偉大さを誇る資本を得ると同時に、旧来の忠孝を指導理念とする宗族信仰の契機ともなった。

5. 新たな信仰実践の誕生

李氏祠堂は、一族の烈士らのおかげで、1950年代から1970年代にかけての間で、近代科学観念の普及や革命イデオロギーの下で行われていた長期にわたる大規模な「迷信打破」運動から弾圧・破壊される運命を巧みに避けることができた。1970年代に最も酷い、伝統的文化を否定し、理想社会の実現を企図するものとしての文化大革命運動で、宗教、伝統のある物、古い物を敵視する紅衛兵が李氏祠堂を破壊する行動も何度かあったものの、族長、村民委員会や同族の努力で、李氏祠堂はなんとか保存された。

1980年代以降、共産党政権は公認宗教の施設以外での布教・宗教活動を一切認めないと宗教政策を緩和し、ソフトな統制へと政策を転換した。その結果文化大革命時より抑圧されてきた各宗教活動が盛んに復興することになった。農村地域では、「村々に寺廟があり、神様に詣でては、巫医を聞く」一方で、新たに寺院を修築して宗教信仰活動を行うといった活動がブームにまでなっている（秀村 1993:65）。李氏祠堂を事例としてあげると、李氏祠堂は、同族から厚い保護を受け、同族の統一感を維持し強化する役割を果たしていると同時に、李氏一族を超えた信者を集めてきた。考えられる複数の原因是以下のようなものである。

5-1 軍隊の政治的介入

1945 年に治陶鎮に起これた晋冀魯豫軍区に約 32 万人の陸軍軍隊が駐屯していた。治陶鎮を中心とする 10 km 圏に属する固義村は軍事拠点に選定され、中継・補給基地として強化が進められていた。1985 年及び 1997 年の二回、大規模な軍備縮小の推進で、部隊の規模が小さくなつたが、固義村の近くにいる駐屯軍は、現在までずっと存在し続けている。部隊を構成する兵士個々の能力を高めることは、部隊の任務遂行にとって不可欠な要素である。このため、隊員の訓練や部隊の整備などを行い、精強な隊員や部隊を練成するとともに、知識及び思想教育—いわゆる「愛国主義教育」をも身につけさせている。従って、愛国主義教育の素材も極めて幅広いモノから掘り起こされ、例えば、各種の博物館、記念館、烈士記念建造物、革命戦争中の重要な戦役や戦闘を記念する施設は、愛国教育基地として指定され、積極的な教育活動が行われている（王 2012）。



写真 3 部隊は烈士遺族の案内で祠堂を仰ぎ見る

このような状況の下、固義村付近の部隊は李氏祠堂を兵士教育活動の授業計画に組み入れる【写真 3】。毎年、新兵入隊や復員の儀式は、祠堂の前で盛大に挙行される。他に、建軍記念日（8月1日）や朝鮮戦争記念日（10月25日）にも、祠堂に花輪を捧げ、詩歌を朗読するのが恒例となっている。また、部隊は総合的な優勢を發揮し、李氏祠堂の周りに常緑樹を植え、李氏祠堂への修繕をする仕事も入った。

一方で、部隊は村民への配慮を大切に扱い、創造性に業務を展開し、村民に無料巡回で受診・診察・診療を提供する。これら一連の施策は、勿論、村民の人気を得て、大歓迎された。村民は五烈士のおかげで、いろいろな支援があったように思うと同時に、李氏祠堂に対して、何か非常に懐かしい、心を和ませる空間であるという特別な感情を持つようになった。このように、毎年、部隊が李氏祠堂に参拝するたびに、村民もよく一緒に参って、祈りを捧げる習慣が完成していった。

5-2 村民委員会の庇護

村民委員会は農村における住民組織として、1954 年以来存在し続けた居民委員会より、1998 年発布された「村民委員会組織法」に従って再び作られた国家の末端行政機関である。いわば中国社会を下から支えている存在だと言ってよい。このように、村民委員会は上級機関の定められた政策・法律・政令を村民にすばやく確実に通達・伝達する一方で、村における公共事務及び公益事業を処理し、民間の紛争を調停し、社会治安の維持に協力し、上級の人民政府に村民の意見及び要望を反映させ、提案を行う。即ち、上級政府と村民の間に挟まれた村民委員会は、行政的任務を担う同時に、自治的任務をも負うという二重の性質を帶びている。従って、村に所属する村民全体はその成員であり、しかも、当該地域内の公共事務を管理する権利を有している村民委員会は、上級政府の正しいと思われた政

令と村民の要求が食い違った際には、勿論、村民利益の角度から出発し、村民の意思に従うようになるのが普通である。つまり、村民委員会と上級政府の間に軋轢があることについては容易に想像できることである。

固義村の村民委員会は、建国後の一連の迷信打破運動で、この苦境に直面している。その時の状況は、固義村に存在している寺廟や祠堂は迷信とみなされ、廃棄や解体しなければならないというものだった。当時、マルクス主義に基づいて宗教が徹底的に否定され、全国には沢山の寺廟や教会、宗教的な文化財が破壊された。固義村の場合は、実際に更に酷いことが行われた。運動の結果こうした幾つかの一族祠堂は壊滅的打撃を受け、その歴史は断絶された。しかしながら、盾に両面があるように、実際の動きにも明るい側面もあった。遠い祖先から伝えられてきた文化遺産が破壊されることに対して、村民委員会や村民は上級政府の政令に屈すと共に、できるだけ文化遺産を破壊活動から守る運動も展開した。村民委員会や村民は優れた古建築を牛小屋・家屋・倉庫にみせかけるとか、建物の周りに壁を築くとか、文化財に毛沢東の肖像画を貼り付けるとか、色々工夫した。そうすることで村の古建築は破壊活動から数多く保存してきた。李氏祠堂はその中の一つである。

1980年代以降、社会情勢の急激な変化の中で、愛国主義・集団主義・社会主义の思想教育、特に愛国主義教育を一層強化する必要性が繰り返し強調されるようになった。村民委員会は李氏祠堂を豊かで生き生きとした愛国主義の教材として、村立小学校・中学校の生徒達によく見学させる。現在に至るまで、どのように李氏祠堂を深く掘り下げて故郷を愛する郷土教材として村民に宣伝するということは、村民委員会の要務だと考えられている。

5-3 祠堂の不思議事件

中国には「天有不測風雲、人有旦夕禍福。(天に不測の風雲あり；人に旦夕の禍福ある)」という諺がある。言い換えれば、人生は多すぎる完璧さがなくて、変転浮沈、曇る晴円は会常に欠けて人々を伴って、広く世間に流れている。固義村の場合は、村民は不如意の苦しみに直面した時、すべての方法によって無効化された後、いつも宗教を借りて、神様に祈り、一刻も早い解決を求める。若しも後で不幸な境遇が変わったら、それは自分の努力で勝ち取れるものではなく、神様にお世話になった賜物だと深く信じている。

李氏祠堂は、唐詩に「山不在高、有仙則名。水不在深、有龍則靈。(山は高きに在らず、仙有らば則ち名あり；水は深きに在らず、竜有らば則ち靈ある)」と詠われているように、幾つもの不思議な事件で、謎に包まれている点が人気を集め、村民だけではなく、訪れる参拝客もいるほどだという。ここで例として挙げたいのは、不妊症になった張氏のことである。1990年に20歳になった張氏が隣村からお嫁さんとして迎えられ、王家に嫁いで入籍するようになった。

中国の伝統的結婚観¹⁴⁾として、祖先を祭ることと家を継ぐ男の子を産むことが結婚の主要目的だと考えられた。結婚は男性と女性が夫婦を名乗る同居権利及び互いに協力、扶助などの義務を持つだけではなく、互いの血族から姻族として扱われる。従って、息子に早く良い嫁をもらい、娘に早く頼りになる婿を見つけて結婚させるのは、親としての最大の人生目標となる。息子が早く結婚すれば早く家の後継ぎを産むことができ、娘が早く裕福な家庭に嫁げば早く幸せになり、親の経済的な負担も軽減することができるからである。女性は男子を生むという役割を果たすために他家へ嫁ぐのである。もし男子が生まれないとなれば、女性の精神的な負担は計り知れないものとなる。彼女達は結婚という未知の世

界へ飛び込むことに対する不安を抱えながら、他家へと嫁ぐと同時に家事から農事の手伝いに至るまで家庭生活全般を担い、ある時は姑や夫の兄弟の逆遇に耐え忍び、男子を産むという責任を常に感じながら生きていかねばならない。これらに対して彼女達はいつの日も感情を露わにすることなく、ただただじっと耐え続けるのである。女性にとって結婚生活は、往々にして肉体的負担は当然のこと精神的にも苦痛に満ちた生活となる（張 1994）。このような社会的背景の下で、張氏は早く結婚して早く子供を産むことを非常に重視するという社会的雰囲気の中で、早く妊娠することを期待していた。

しかしながら、6ヶ月どころか、一年経っても、張氏は妊娠しなかった。病院できめ細かく診察して、張氏が不妊症と診断された。そのため、張氏や家族は大打撃を受けた。このことは村でも異常現象として注目された。特に農村地域における固義村という相対的に閉塞した小社会では、プライバシーという意識もなく、各個人の私生活が常に村民の茶飲み話の種となるため、張氏への圧力はなおさらである。その後、張氏は二年間ずっと複数の病院において、きちんと薬を飲み治療したものの、全然効果が現れなかったと言う。張氏とその家族は、「本人が無能だ」とか「両親が無能だ」とか「その家族の前世の悪業への報いだ」などの誹謗中傷を浴びることになった。張氏はいくども自殺を試み、そのつど夫に助けられたという。

その時に、毎日、李氏祠堂の手入れを行き届かせる李教強の母親は、仏教を深く信じる一人の信仰者として、張氏の不幸を目の当たりにして、どうしても助けてあげたい。効き目の素晴らしい妙薬を持つというわけではないが、誠心誠意を持って、全身全霊で祈ると、神様から導きや祝福を受けて守ってくれるのができると信じているお婆さんは、陽氣・陰氣論¹⁵⁾を鼓吹し、五烈士の陽気に借りて、張氏の体内の悪い陰気を撲滅でき、その後、張氏はすぐに妊娠できると張氏とその家族に勧めていた。病気が治癒されるということを盲目的に信じる張氏は、当時に他の良い方法もない状況下で、妊娠の欲望に駆り立てられて、毎日、李氏祠堂に詣でるようになった。

祈り方として、まず、線香を両手に挟み、祠堂の供物台の香炉で線香を点ずる。次に、諸祖先や五烈士の位牌に向かって、跪いて最敬礼し、自己紹介（名前、生年月日、住所）してから祈願書を厳かに捧げ祈願する。最後に、線香を完全にあげて願書と金紙を焼いたら三回お辞儀をして祈りが終わる。この祈願活動は必ず張氏が自らの個人的祈りだけを祈るという自然の像だという理由があったという。このように、1993年10月から1994年5月まで、張氏は日々、祈願を続けた。すると不思議な事に、張氏が妊娠した。1995年2月、張氏が家で男の子を出産した。当時、この神異事件は、トップニュースとして、村で速報されたらしい。

これ以外にも、例えば、文化大革命時代に李氏祠堂を取り壊そうとした人が不思議に負傷したこと、病気になった小学生の王君が不思議に回復したこと、借金を回収できずにいた丁氏が容易にそれを回収できたこと、などの不思議な出来事があったという。

5-4 家族の手厚い保護

上記に述べたように、五烈士の位牌を李氏祠堂に安置するために、元村民委員会の一員としての李教強の父親は、さまざまな工夫を試みた。その努力により、まずは、李教強烈士の位牌が祠堂で奉祀されるようになった。その後、李教強の母親が、重ねてきた結果、李氏祠堂は一族集会、冠婚葬祭、重大な祝祭日のみ開館するという状況が一変した。

李教強の母親は、毎朝、祠堂に行って、祠堂の周りをきれいに掃き清めてから、線香とローソクをあげて、酒、水、花、供え物（野菜・菓子・果物）等を用意している。季節によって、畑の幸（芋・大根）、山の幸（干し椎茸・りんご）、川の幸（マコモダケ・蓮根）等を供える。朝鮮戦争が拡大するに従って、他の李氏同族の四烈士も祠堂に位牌が置かれ、祀られるようになった。また、李教強の母親は自分で五烈士の彩色された塑像を作り、これを家宝として後世に伝えようとした。従って、この44年間の努力によって母親は菩薩の化身とも言われた。しかも、李教強の母親は、村唯一の経験豊富な助産婦として、27年間働いて、自らが取り上げた赤ちゃんの数は200人以上を超えたという。また、李教強の母親は、近所、親戚どころか、義理親、家族とは全く喧嘩しないで一緒に暮らしている。これらのことにより、李教強の母親は奉仕型が心優しいというプラスイメージを村民達に与えた。老若男女から深く尊敬されるようになった。1997年に李教強の母親は87歳の高齢で自然死になったが、李氏祠堂はその生前の主要な活動場所として、数多くの村民が追想に訪れている。

その後、李教強の一番下の妹の李教恵は母の代わりに、毎日、祠堂に行って参拝するようになった。李教恵は末子として、子供の頃からずっと母と祠堂に参拝している。大人になった後、将来、母のように祠堂を守るために、李教恵はずっと固義村に留まりたいと思っている。それから、李教恵は結婚を決意する時に、固義村を離れない、わざわざ同村の王家に嫁すことになった。現在、曾孫も持っている李教恵（76歳）は、母の遺志を継ぎ、先祖や家族への追憶と崇敬を重ねているとともに、丁寧に手入れ、李氏祠堂を大切に守っている。

5-5 村祭の限取室兼用

毎年、旧暦の1月14日に、古来より600年にも亘って村人達の手で続けて伝承されてきた民間信仰「捉黄鬼」は固義村で盛大に演じられる。この期間で、村全体が舞台になり、大いに賑わうのである。

祭りは14日の午前中、太子の神像を村外れの小さな廟に迎えるという神迎えから始まる。夜になると、殆どの村人は夜通し寝ずの準備に忙しい。準備が完了次第、まず、戦のように騎馬の先駆けが村の通りを駆けて偵察し、その後ろを100人ほどの隊列が続く。旗手とチャルメラの楽隊を先頭に、仮面を着け、芝居の鎧を着た武将達が長い槍を打ち鳴らしながら村を練り歩く。そして、夜明けが訪れる時になると、鬼役が放たれ、昼夜を通しての鬼の捕り物が始まる。黄鬼は代々決まった家のものが演じることになっており、村人は一睡もせず、各々棍棒や槍を持って翌朝まで黄鬼を追い回す。15日の午前、御用となつた黄鬼は鎖に繋がれ、村を引き回された後に閻魔大王の前に突き出され、午後に処刑されてしまうのである。邪氣払い、鬼払い、街中引き回し、裁き、鬼殺しなど一連の儀式で、鬼を追い払い邪気を鎮めるという捉黄鬼のプロセスは、親不孝、妻や目下の者を粗末にするなどの不品行を戒め、人そのものを正し、道徳行為を導くものである。16日に、さらに仮面劇、地方劇、芝居のコンテスト、獅子舞、武術、山車、竹馬などの出し物が演じられる。この盛大な行事は天候の安定、五穀豊穣、家庭円満、天下安寧などの一般庶民の伝統的願望を表すものなのである。

ここ数年ずっと、李氏一族の方は村祭りの総指揮を務めてきた。従って、祭りの間、李氏祠堂は事務所になった。村祭出演のために、村全体で仮面をかぶる者は40人ぐらい、顔

に隈取りを施された者は400人以上に達するそうである。さらに花会の出演やそれを様々な形で手伝う大勢の人を加えれば、どの家もほぼみな祭りに参加しているといつてもいい。祭りの日、李氏祠堂では、顔に隈取りを施したり、仮面を被ったり、舞台用の服装を試したり、道具を整えたりしながらひっきりなしに出入りする村人たちで賑わっている。このように、村祭が行われる間で、李氏祠堂は何よりも固義村コミュニティの「心のよりどころ」として、村民全体の信仰活動を通して祭りの魅力をより多くの人に楽しんでもらう場となり、村民達に愛されている。

5-6 村民信仰者の増加

「人間が、思想・信仰を追及するのは自然の傾向であり、取り締まることができないものだ。信仰の自由は、人間性の内なる需要に基づいたものだ」（中島 2005:283）とある学者が指摘したように、中国では1980年代に入ると、文化大革命の反省から一転して伝統文化の尊重が謳われるようになり、宗教伝統が各地で息を吹き返した。特に1990年代以降、民間信仰はかなり急速に再興されている。

その一方で、1980年代の経済改革・対外開放政策の展開に伴い、農村社会は質的に大きく転換した。商品経済の導入で、農村部が経済的に豊かになり、農村内部での所得格差が拡大してきた。農民達の間にはより豊かな生活を求めて立ち向おうとする意識が芽生え始め、市場経済の波に乗ろうと奮闘し、成功を収め、豊かな暮らしを手に入れるという新型の農民が登場した。毛沢東時代には許されなかつた個人の利益を追求することも市場経済導入によって可能となった。勿論、その中には以前と変わらない日常を重んじて生きている人々も当然存在している（石井 2012）。つまり、改革・開放期を境に不変の日常を重視する農民と現代化の中で新しい人生を歩もうとする農民が新たに出現している。

改革・開放期を迎えた現代は、言わば伝統と現代化の融合とも言うべき時代であって、その中を二種類の農民が生きているということが可能であろう。どちらにあっても、金がすべてという風潮の中で、人々は嘗て邪気を払い、神力の助けを借りて命運・現実を変えると願う心理状態になっていることが多い。貧富の差の拡大や将来への不安などから農民層を中心に宗教を信仰する人が急速に増えている。こうした農民の願いは、時に迷信や非常儀礼などにも現れる（石井 2012）。固義村を例としてあげると、例えば李氏祠堂で無病息災を祈願する儀礼であるが、自分や家族が強く健康な体を持つことに対する村民達の願いは何よりも強い。そのため生命を脅かすような事態に遭遇すると、その事態から一刻も早く切り抜けるための非常儀礼を敢行するのである。これらは文化大革命期においては封建迷信的なものとして批判の対象とされ、禁止・破壊された。しかしながら、現代において徐々に農村地域で復活しつつある。文化大革命や市場経済導入といった大きな変化にも動じることなく存在し続けるところに伝統の根強さを見てとることができ、不安定で困難な日常の中で生きる村民の精神的な拠り所となっているのであろう。

現在の李氏祠堂は、特に元旦、旧正月、清明節、7月15日（旧暦の中元節）、8月1日（建军節）、9月9日（旧暦の重陽節）、10月1日（旧暦の冥陰節）、10月25日（朝鮮戦争記念日）などの日に、五烈士が祭神として祀られ、病気平癒や室内安全などを願いにたくさんの参拝者が訪れる【写真2】。李氏祠堂は李氏一族の家廟から全員村民から敬慕する村廟になった。



写真2 祠堂に村民の方々が初詣参拝に訪れる

6. おわりに—復興の民間信仰

今まで10回に修正された『中国人民共和国憲法』は宗教信仰の自由と信仰しない自由を規定しているが、マルクス主義の無神論が採用された。よって、国家は、政府が認可した組織と登録された活動場所に宗教の実践を限定し、宗教団体の成長と活動の範囲を統制している。また、国家は、政府と中国共産党の統制以外の権威の源となりうる集団が浮上するのを防ぐために、宗教団体を管理および規制しようとするのである。しかしながら、政府のこうした統制にもかかわらず、多くの信仰の信者が急速に増加している（佐藤・太田2011）。

1980年代以降の中国では、改革開放に伴い、民衆の宗教信仰心が抑圧された過去に反発する形でよみがえった。特に農村地域における民俗宗教は、政府からの宗教保護政策もこれらを支えていないが、強い融合力と生命力で小規模な地域社会にとどまっており、儀礼や呪術、祭式や行事によって、民間社会の信仰として代々継承されている。この民俗宗教の復興事業が進む原因については、国家宗教政策面の緩和のほかに、人民公社の廃止などによって村落に対する行政の直接管轄が揺らぎ、社会主义計画経済制度による集団農業制から農家の各戸請負制に変えたことも、人々には再び、自主権と自由な活動空間を与えてくれた。これこそが、民俗宗教にとって最も重要な条件の一つである。また、「逢村必有廟、无廟不成村（村々には必ず祭祀の道場である廟があり、廟がないと村にならない）」という中国の伝統的な農村地域社会には、村廟や祠堂は欠かすことのできない施設である。人々はその中に祀られている諸神に特殊な感情をもっている。一方で、画一的な経済成長最優先の競争社会において、農村部から都市部への出稼ぎ労働者者同士で競争が生じる。従つて、終身雇用が崩壊し、貧富の差も拡大し、将来に対する漠然とした不安感が増加している。それゆえにこそ人々は、人間存在にまつわる不安や苦悩を癒すことを社会的役割として担ってきた民俗宗教の教えを必要とした（三谷 2000）。今は村民達は自由に活動の展開

ができ、国家は信仰活動への過干渉がない。

15 カ軒の村廟も持っている固義村は、敬虔な信仰者が今もたくさん存在している。これらの信者は旧暦の毎月の 1 日、15 日にそれぞれの村廟へ参り、神様や仏像に参拝し、線香を捧げる。村廟の中で李氏祠堂は最も信仰者に人気があり、他村の信仰者を増やしているようである。村民達は経済的に困難でも、喜んで寄進する。言い換えれば、三方を山に囲まれ、外界との接触を拒むかのように存在する内陸の固義村では、村民のほとんどが信仰する儒仏道の三教合一という独特の土着信仰がある。李氏祠堂は村民の文化祭を行う場所の一つとして、この村の物語の舞台となる。

日常の世界でも非日常の世界であっても、農民達それが自らの楽しみや喜びを見出し、また様々な願望を抱いて生活している。そして彼らが日常に見出す楽しみや喜び、願い、非日常の世界で見られる迷信や厄払い儀礼といったものは時代の変遷と共に変化するとはいえ、常に彼らの生活を彩りあるものにし、また支え続けているのではないだろうか。そして、これらは農民達の「生きる」という欲求から生まれてきたものではないかと筆者は考える。

改革開放後の中国では、とりわけ、1990 年代以降の共産党政府は、国家の文化的アイデンティティを表象し形成するために、伝統文化を代表とする無形の文化遺産に対して、全力でその保護事業の推進を尽くすことになっている。従って、伝統文化の 1 つとしての民間信仰は、宗教として政府から認可されないが、全国各地で無形文化の財への保護運動によって、「迷信」というレッテルを貼られた民間信仰も、消滅ではなく中断であって、機会があれば、復興され、創造される可能性があると思う。

注

- 1) アーサー・ヘンダーソン・スミス (Arthur Henderson Smith 1848-1932 年) は、アメリカ人宣教師で、中国で明恩溥という名前をつけた。1872 年にアメリカの外國傳道委員會から派遣されて中国の天津に渡り、1880 に年山東省に移動、山東省の西北の省境に近い龐家莊とう農村の教會で布教に從事。義和團事件を身を以て體驗していて、『支那の性格』、『支那の文明』、『騷乱の支那』、『支那人の素養』等の中国に関する著書がたくさんある。
- 2) 清朝の中国で、1850 年に起こった大規模な反乱。洪秀全を天王とし、キリスト教の信仰を紐帶とした組織太平天国によって起きた。
- 3) 1966 年夏から 10 年間にわたって繰り広げられた熱狂的な大衆政治運動である。毛沢東自身が主導し、直接紅衛兵を動員して、既成の一切の価値を変革すると主張した。毛沢東絶対化という一連の大変動によって、中国社会は激しく引き裂かれ、現代中国の政治・社会に大きな禍根を残して挫折した。1980 年代以降「重大な歴史的誤り」として全面否定された。
- 4) 農業集落とは、市区町村の区域の一部において農業上形成されている地域社会のことであり、もともと自然発生的な地域社会であって、家と家とが地縁的、血縁的に結び付き、各種の集団や社会関係を形成してきた社会生活の基礎的な地域単位である。具体的には、農道・用水施設の維持・管理、共有林野、農業用の各種建物や農機具等の利用、労働力（結い、手伝い）や農産物の共同出荷等の農業経営面ばかりでなく、冠婚葬祭その他生活面にまで密接に結び付いた生産及び生活の共同体であり、更に自治及び行政の単位として機能してきたものである。「2010 年世界農林業センサス」において「農業集落」の

定義を参照できる。2013年06月13日閲覧

http://www.maff.go.jp/j/tokei/census/afc/2010/dictionary_t.html#t12

- 5) 畝は中国で地積の単位の一つで、日本の畝（せ）とは別のことである。6尺四方を1歩とし、古くは100歩、後には240歩を1畝とした。現行の1畝（ムー）は15分の1ヘクタール（6.67アール）に相当する。
- 6) 郭沫若（1892-1978年）は、中国の近代文学・歴史学の先駆者で、中華民国、中華人民共和国の政治家、詩人である。政務院副総理、中国科学院院長、中日友好協会名誉会長などを歴任した。1914年に日本に留学し、1923年に九州帝国大学（現・九州大学）医学部を卒業。
- 7) 行政村は、中国における地方公共団体の一つである。改革開放に入ると、中央集権化のため、自然村の合併が推進された。こうして、嘗ての村落が幾つか集まって新たな村ができるが、これを自然村と対比して行政村とも言う。この場合の村は、自然村よりずっと広い範囲の地域である。
- 8) 『武安県誌』は嘉靖1547年・天啓1625年・康熙1711年・乾隆1740年・民国1940年・現代1990年・斬新2010年に7回改訂版を出した。
- 9) 元の末頃から明初期にかけて、戦乱、自然災害、飢饉などが続き、河北省・河南省・山東省・安徽省など多くの地方では、人口の数が著しく減少したが、山西省、特に省の南の洪洞県のあたりは、天候は順調で、経済も繁栄し、各地から難民達もやって來たので、人口過密地域になった。新しく政権を得た明政府は、政治の安定と経済の発展のため、洪武初年（1368年）から永楽15年までの50余年の間に、洪洞県から8回に亘って、大規模的な移民を行った。
- 10) 中国共産党が国内戦争中に華北地区（現在の山西省・河北省・山東省・河南省に跨る）に設立した解放根拠地であり、15万km²、117カ県、2500万人の規模であった。
- 11) 治陶鎮レベル文化財登録制度とは、2002年の文化財保護法改正により創設された文化財登録制度に基づき、国家级、省区級、市県級、郷鎮級の四つのレベルに分けられる文化財登録原簿に登録された有形文化財のことである。固義村には五つの建造物が鎮レベル文化財に指定された。
- 12) 中国の宗廟における太祖以下代々の靈位席次の配置を指す制度である。中央とする太祖から見て、左側に2世・4世・6世などと偶数代を並べて昭と呼び、右側に3世・5世・7世などという奇数代を並べてと穆呼ぶ。周代の制度とされるが、実際は戦国時代以後に整備され今議論される形になったものである。
- 13) 李氏の掟によると、家督の嫡子で、しかも自然死亡の条件を満たす際に、祠堂で位牌を作つて祀られ、祖譜に記載されることができる。即ち、非自然死亡（戦争・自殺・犯罪・火事・水害・交通事故・未成年などの死亡）の者は、直系卑属の長男としても、祠堂や祖譜への入籍ができない。
- 14) 治陶鎮レベル儒学の古典『礼記・昏義』の44編によれば、結婚は「昏礼者、将合二姓之好、上以事宗廟而下以繼後世也。（二姓の好きを合わせて、上は以て宗廟に事え、下は以て後を継がしむ）」と記載されていることである。
- 15) お婆さんの考え方によれば、健康によい影響を与える気はいろいろある。例えば、体内の氣からいうと、陽気、生氣、元氣、真氣、先天の氣などがある。これらの氣は生命を生み、生命体のバランスを保ち、体内の新陳代謝を順調に活かすなどの力と役を持っている。こういう気が身体にたくさんあると、精神を明るくすること、健康に保つこと、長寿になることなどの効果がある。これに対して、健康に悪い影響を与える気が同じく存在している。その中には濁氣、穢氣、邪氣、陰氣などがある。こういう気が、体のバランスを崩し、体の生命力を破壊する力を持っている。さらに、生物に病気をさせ、滅ぼすまでの力も持っている。だから、こういう健康に悪い影響を与える気が身体にたく

さん入ると、精神的に憂鬱になること、体調が崩れること、病気にかかること、自殺する気持ちが強くなることなどの症状が現れる可能性が高くなる。体内だけではなく、周りのある場所にも、健康に悪い気の集まっているところがある。李氏祠堂は祖先や五烈士の祭祀場所として、祀られる者は殆ど男の子、いわゆる陽気満々である。張氏の体内に留まった余分の陰気を消すと、不妊のことだけではなく、他の病気も治ると強く主張している。具体的な事例と基本的な理論は（青島 2009）を参照できる。（このことは張氏から聞き取った。張氏、女性 1970 年生まれ、専業主婦、1990 年に隣村から固義村の王家の嫁になった、一人息子の母。2013 年 2 月聞き取りの抜粋）

【参考文献】

- 青島大明, 2009, 『病を治す哲学—伝説的医書「黄皇内經」』 講談社.
- 石井弓, 2012, 「山西省農村における雨乞い—農民の視点から「迷信」を捉える」『中国研究月報』 66 (6) :1–19.
- 王永芹, 2012, 『鄧小平晋冀魯豫根据地建設思想与実践創新』, 河北人民出版社.
- 王慈嫻・王新栄・丁計良, 2012, 『中国・武安儺戲』, 河北美術出版社.
- 科大衛, 2003, 「祠堂与家廟—從宋末到明中葉宗族礼儀的演变」『歴史人類学学刊』 1 (2) :1–20.
- 何宗光, 2011, 『1950–1953：僕は朝鮮戦場にいる』, 長征出版社.
- 川口幸大, 2013, 「現代中国における宗教と信仰の諸相」『現代中国の宗教—信仰と社会をめぐる民族誌』瀬川昌久編, 昭和堂, pp. 1–19.
- 佐藤仁史・太田出, 2011, 『中国農村の民間芸能—太湖流域社会史口述記録集 2』, 渋古書院.
- Smith, A_H_, 1899, Village Life in China; A Study in Sociology, F_H_Revel1 Company
=1941, 仙波泰雄・塩谷安夫訳, 『支那の村落生活』, 生活社.
- 錢江, 2008, 『晋冀魯豫人民日報記実』, 人民日報出版社.
- 潘志華, 2002, 『新しい文書と歴史：朝鮮戦争（河北卷）』, 東方出版社.
- 関口泰由, 2004, 「中国共産党政権下における宗教—宗教政策を中心として」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』 5:68–78.
- 張萍, 1994, 『中国の結婚問題』, 新評論.
- 丁偉, 2010, 『忘がたい 1950：志願軍入朝参戦 60 周年』, 新華出版社.
- 杜学徳, 2010, 『武安儺戲』, 科学出版社.
- 中島岳志, 2005, 『ナショナリズムと宗教—現代インドのヒンドゥー・ナショナリズム運動』, 春風社.
- 秀村研二, 1993, 「現代中国における宗教復興」『明星大学研究紀要』 1 : 63–72.
- 白松強, 2013, 「中国河北農村における民間信仰が無形文化遺産化される過程に関する一考察—国家レベル無形文化遺産の武安儺俗を事例として」『年報非文字資料研究』 9:119–133.
- 馬場毅, 2006, 「近代国家と宗教—日中両国を比較して」『現代中国学方法論とその文化的視角』, 愛知大学国際中国学研究センター, pp. 229–234.
- 麻国慶, 2003, 「「家」の再構築：中国における宗教組織とその復興—日本の同族との比較」『CAS NEWS LETTER』 121:41–60.
- 三谷孝, 2000, 『中国農村変革と家族・村落・国家—華北農村調査の記録』, 渋古書院.
- 熊坤新, 2008, 『宗教理論と宗教政策』, 中央民族文化出版社.
- 楊繼繩著・伊藤正・田口佐紀子・多田麻美訳, 2012, 『毛沢東大躍進秘録』, 文藝春秋.
- 羅宏, 1547, 『武安県誌（嘉靖版）』第一巻（祀典誌・祠廟）.